県道吉間田滝根線関連遺跡発掘調査報告１

八反田遺跡

序　　文

福島県では、東京電力福島第一原子力発電所の事故により、避難指示が出された地域周辺において、復興と避難住民の帰還を加速させるための施策の一つとして「ふくしま復興再生道路」と位置づけ整備を進めているところです。「ふくしま復興再生道路」の一つに位置づけられた県道吉間田滝根線は、いわき市川前町小白井地区と田村市滝根町広瀬地区を結ぶ一般県道で、狭小な幅員部分や急カーブ等の交通難所の解消を目的として、本県土木部がトンネルや長大橋の施工等の改良工事を実施しています。

福島県教育委員会では、この事業地内にある埋蔵文化財包蔵地について、本県土木部と保存のための協議を重ね、現状での保存が困難なものについては、発掘調査により記録保存を図ることとしました。

本報告書は、平成30年度に実施した田村郡小野町大字小野新町字八反田に所在する八反田遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。発掘調査の結果、縄文時代、弥生時代、古墳時代にわたる遺構・遺物が発見されました。

本報告書が、文化財に対する県民の皆様の理解を深めるとともに、地域の歴史を解明するための基礎資料や生涯学習資料として、広く活用いただければ幸いに存じます。

結びに、発掘調査の実施に当たって御理解と御協力をいただいた福島県土木部県中建設事務所、小野町教育委員会、公益財団法人福島県文化振興財団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

令和元年〇月

福島県教育委員会

教育長　　鈴　木　淳　一

あ い さ つ

公益財団法人福島県文化振興財団では、福島県教育委員会からの委託を受けて、県内の大規模開発に伴う埋蔵文化財の調査を行っております。本報告書は、東日本大震災からの復興事業「ふくしま復興再生道路」の一つに位置づけられる県道吉間田滝根線改良工事にかかる埋蔵文化財調査のうち、平成30年度に実施した田村郡小野町に所在する八反田遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

八反田遺跡は、縄文時代晩期、弥生時代中期、古墳時代前期に渡る複合遺跡であることが確認されました。特に、古墳時代前期に属する土器の中には、地元の土器に混じって北陸地方に見られる土器の特徴を有している資料も散見できました。古墳時代前期における人々の交流や文物の交易が広範囲に渡っていたことを裏付ける貴重な資料となります。

本報告書が今後の歴史研究の基礎資料として、さらには生涯学習の場や郷土の歴史を知る上で幅広く活用していただければ幸いです。

終わりに、東日本大震災からの早い復興が達成されますことを祈念するとともに、今回の発掘調査にご協力いただきました関係諸機関、並びに地元住民の皆様に厚く御礼申し上げます。また、当財団の事業の推進につきまして、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願いいたします。

令和元年〇月

公益財団法人　福島県文化振興財団
理事長　　大　沼　博　文

緒　　言

１．本書は、平成30年度に実施した県道吉間田滝根線関連遺跡発掘調査の報告書である。

２．本書には、福島県田村郡小野町に所在する八反田遺跡の調査成果を収録した。

　八反田遺跡　　福島県田村郡小野町大字小野新町字八反田

　　遺跡番号　52200147

３．遺跡発掘調査事業は、福島県教育委員会が福島県土木部の委託を受けて実施し、調査に係る費用は福島県土木部が負担した。

４．福島県教育員会では、発掘調査を公益財団法人福島県文化振興財団に委託して実施した。

５．公益財団法人福島県文化振興財団では、遺跡調査部調査課の次の職員を配して調査にあたった。

　副主幹　佐々木慎一

また臨時的に、文化財主査　渡邉春喜の協力を得ている。

６．本書の執筆・編集は、佐々木が行った。

７．本書に使用した地図は、国土交通省国土地理院発行の２万5000分の１地形図、並びに福島県土木部福島県県中建設事務所が作成した工事用図を複製したものである。

８．本書に収録した調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。

９．発掘調査に際しては、次の機関から協力・助言をいただいた。

小野町教育委員会

用　　例

１．本書における遺構図の用例は、以下のとおりである。

(1) 方　　位　　図中の方位は真北を示す。

(2) 縮　　尺　　各挿図中に縮尺率を示した。

(3) ケ　　バ　　遺構内の傾斜部は「 ⅏ 」、相対的に緩斜面の部分には「 ⅏ 」、後世の撹乱や人為的な掘削部は「 ⅏ 」の記号で表現した。

(4) 標　　高　　図中に示した標高は、海抜高度を示す。

(5) 土　　層　　遺構外堆積土は大文字のＬとローマ数字で、遺構内堆積土は小文字のℓと算用数字で表記した。

（例）遺構外堆積土…ＬⅠ・ＬⅡ　　遺構内堆積土…ℓ１・ℓ２

(6) 土　　色　　土層注記に使用した土色は、小山忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新盤標準土色帖』を用いた。

２．本書のおける遺物図版の用例は、以下のとおりである。

(1) 縮　　尺　　各挿図中に縮尺率を示した。

(2) 土器断面　　須恵器の断面は黒塗り、粘土積み上げ痕を一点鎖線で示した。

(3) 遺物番号　　挿図ごとに通し番号を付し、本文中では下記のように省略した。

（例）図１の３番の遺物…図１－３

遺物写真中で付した番号は、挿図中の遺物番号と一致する。

（例）１－３…図１－３

(4) 遺物計測値　　（　）の数値は推定値、［　］の数値は遺存値を示す。

３．本書で使用した略号は、以下のとおりである。

小野町……ＯＮ　　八反田遺跡……ＨＴＤ　　土　坑……ＳＫ　　溝　跡……ＳＤ

グリッド…Ｇ　　遺構外堆積土……Ｌ　　遺構内堆積土…ℓ

目　　次

第１章　調査の経過と方法
第１節　調査に至る経緯……1
第２節　調　査　経　過……1
第３節　調　査　方　法……2
第２章　遺跡の概要
第１節　地　理　的　環　境……4
第２節　歴　史　的　環　境……6
第３節　遺跡の位置と周辺地形……11
第４節　基　本　層　位……13
第３章　遺構と遺物
第１節　土　　坑……15
１号土坑(15)
第２節　溝　　跡……16
１号溝跡(16)　　２号溝跡(17)
第３節　自　然　流　路　跡……18
１号流路跡(18)
第４節　遺構外出土遺物……20
第４章　ま　と　め……22

挿図・表・写真目次

［挿図］
図１　県道吉間田滝根線位置図……1
図２　周辺の地形分類図……5
図３　周辺遺跡位置図……8
図４　遺跡の位置と周辺地形……11
図５　遺構配置図……12
図６　基本土層……14
図７　１号土坑……15
図８　１号溝跡……16
図９　２号溝跡……17
図10　１号流路跡……18
図11　１号流路跡出土遺物……19
図12　遺構外出土遺物……21
［ 表 ］
表１　周辺の遺跡一覧……9
［写真］
１　調査区全域……25
２　基本層位……25
３　１号土坑……26
４　１号溝跡……27
５　２号溝跡完掘全景……28
６　１号流路跡完掘全景……28
７　１号流路跡出土遺物……29
８　遺構外出土遺物……30

第１章　調査の経過と方法

第１節　調査に至る経緯

県道吉間田滝根線整備事業は、特殊通行規制区間や防災危険個所、未改良区間の回避により、住民生活等における定時制や速達性を確保するため、いわき市川前地区の県道小野富岡線との交差部を起点として、あぶくま高原道路に接続する延長9.2㎞のバイパス建設事業であり、浜通りと中通りをつなぐ重要路線として「ふくしま復興再生道路」のひとつに位置付けている。

本事業にかかる埋蔵文化財については平成29年度に、ＯＮ－ＹＴ・Ｂ１～Ｂ３の３ヶ所の遺跡推定地について試掘調査を実施した。調査の結果、ＯＮ－ＹＴ・Ｂ１では竪穴住居跡と溝跡が確認され、検出面より弥生時代と古墳時代の遺物が出土したことから、要保存面積1,700㎡が確定し、八反田遺跡として埋蔵文化財包蔵地台帳に登録した。この時の調査成果は、平成30年９月刊行の『福島県内遺跡分布調査報告25』に掲載した。

第２節　調 査 経 過

八反田遺跡は、福島県教育委員会が平成25年度に実施した県道吉間田滝根線建設に伴う分布調査において遺跡推定地（ＯＮ－ＹＴ・Ｂ１）として登録された。平成29年度に公益財団法人福島県文化振興財団が実施した試掘調査の成果により弥生時代・古墳時代の集落跡とされ、道路建設予定範囲のうち1,700㎡が要保存範囲とされた遺跡である。

平成30年度は、年度当初より発掘調査現場立ち上げの条件整備等について福島県教育庁文化財

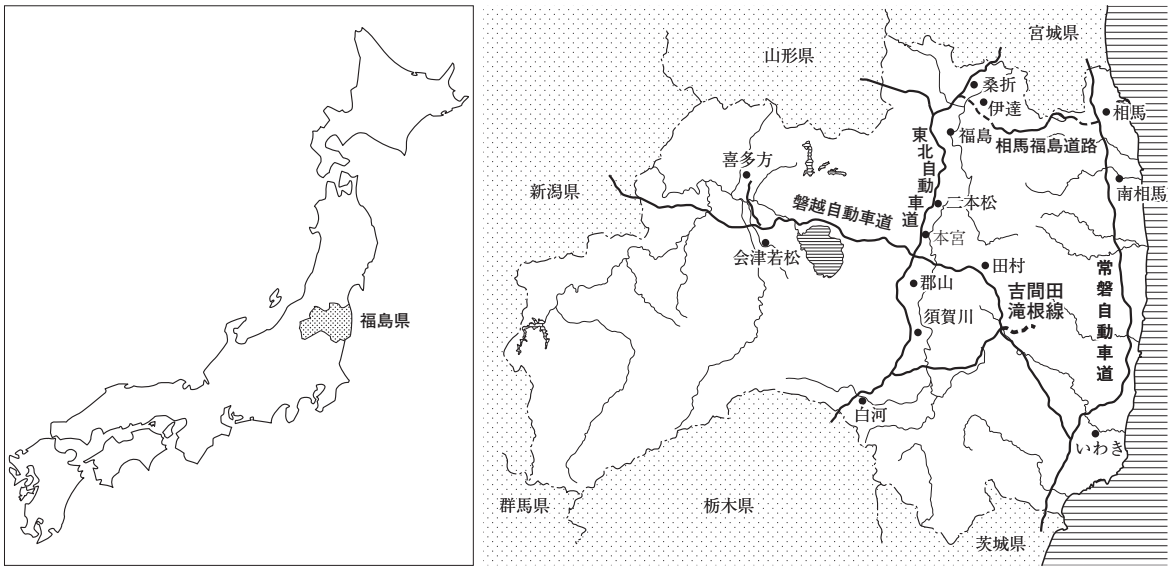


図１　県道吉間田滝根線位置図

課及び福島県県中建設事務所と協議を行った。

７月上旬には調査事務所の設置と発掘器材の搬入等を行い。７月18日からは発掘作業員を投入し、周辺部の環境整備と表土除去の準備等を開始し、19日から重機による表土掘削作業を開始した。

７月下旬には、重機による表土掘削作業を継続しながら、遺構検出作業を行った。前年度に実施した試掘調査のトレンチを精査し、基本層位等の確認作業を行った。27日には重機による表土掘削作業を終了した。

８月上旬、天候不順が相次ぎ作業が思うように進捗しないなか、調査区を上断部・下段部の２ヶ所に便宜的に分けて調査を行う事とし、上段部の遺構検出作業を行いながら傾斜部に形成された谷底平野特有の細かい堆積土の確認作業を行った。

８月中旬、上段部の遺構検出作業の継続と下段部の遺構検出作業を開始した。また、道路建設範囲の設計杭を基に測量基準点を調査区内に移設した。なお、8月13日(月)から17日(金)まで盆休みとした。

８月下旬には、 遺構の分布の状況が見え始め、上段部１号土坑・１号溝跡の精査を開始した。また、１号溝跡に近接して２号溝跡や１号流路跡を検出した。

９月上旬には、２号溝跡や１号流路跡の精査を開始した。また、重機による下段部の土砂掘削を再度開始し、整地土の下位より２号溝跡に連続する部分を検出し、精査に移行した。

９月中旬には、遺構精査を継続しつつ、谷底平野部分の遺物の有無を確認するため、試掘トレンチによる深掘を行い、ＬⅣは無遺物層であることを確認した。なお、安全面を考慮して水没地区の排水作業を行い、試掘トレンチの埋戻しを行った。

９月下旬、検出遺構の精査及び地形測量を終了し、遺跡全景の写真撮影を行った。また、並行して調査事務所周辺の整理及び発掘現場の撤収準備を行った。

10月上旬　調査事務所等の撤去を行い、順次発掘器材の搬出を行った。10月12日(金)には教育庁文化財課及び福島県県中建設事務所の立会の下、現地引渡しを行った。調査開始から現地引渡しまでに要した期間は延べ59日間であった。

第３節　調 査 方 法

八反田遺跡では、(公財)福島県文化振興財団で採用されてきた調査方法に基づいて行った。

調査で用いた測量基準点については、県道吉間田滝根線建設に伴う設計杭より、調査区内の[Ｘ；144,110、Ｙ；69,920]に新たに打設した。調査にあたっては、遺跡全体を国土座標Ⅸ系の座標値で表すことができるようにＸ；144,150、Ｙ；69,850を原点として10ｍ単位のグリッドを設定した。個別のグリッドは、南北方向に北から南に算用数字で１・２…、東西方向に西から東へＡ・Ｂ・Ｃ…とアルファベットとし、両者を組み合わせてＥ５グリッドなどと呼称している。

表土および盛土の除去は重機を用い、それ以外の遺構外堆積土や遺構内堆積土の掘削は、基本的に人力で行っている。遺構の精査は、その特性や規模・遺存状態等に応じて土層観察帯を設けて、土の堆積状況や遺物の出土状況に留意しながら進めた。比較的大型の土坑については４分割法を用い、溝跡等は２分割法を採用した。

遺構の記録は、実測図作成と写真撮影を行った。実測図作成は、平面図と土層断面図の作成を原則とし、平面図については、測量基準を基に光波測距儀を使用し、部分的には簡易遣方測量により作図した。断面図については、調査区内に移動した簡易水準点を基に1/20の縮尺で作図した。

各遺構の平面図の作成に際しては、１/20の縮尺を原則とし、溝跡など長大な遺構については、1/60を採用した。地形測量は、1/200の縮尺で行った。

層位名を付す際には、基本土層についてはローマ数字を用いて「ＬⅠ・ＬⅡ…」と表し、遺構内堆積土は、算用数字を用いて「ℓ１・ℓ２…」と表した。土層の色調は『新版標準土色帖』を参考に記載した。

遺物は、遺構及びグリッド単位での取り上げを行い。出土層位を記録している。

写真撮影は、35㎜一眼レフカメラを用いモノクロームフィルムとカラーリバーサルフィルムを使用して撮影した。また、並行してデジタルカメラも使用した。撮影に際しては、同一被写体の撮影を基本とした。

発掘調査で得られた記録類一式と出土遺物については、報告書刊行後に(公財)福島県文化振興財団の定める基準に従って整理を行い、福島県文化財センター白河館に収蔵する予定である。

第2章　遺 跡 の 概 要

第1節　地 理 的 環 境

福島県は、南北に連なる阿武隈高地や奥羽山脈によって、大きく３地方に分けられている。阿武隈高地以東の太平洋に面した「浜通り地方」、阿武隈高地と奥羽山脈に東西を区切られ、中央を北流する阿武隈川本流の両岸に沿って、帯状に連なる平坦地が形成されている「中通り地方」、奥羽山脈と越後山脈に挟まれた会津盆地を中心とする地域「会津地方」がある。

本書に収録した八反田遺跡は、福島県田村郡小野町に所在する。小野町は阿武隈高地のほぼ中央、中通り地方と浜通り地方のほぼ中間に位置し、面積は125.11㎢、人口は9,959人（平成30年10月現在）である。周辺市町村とは、東にいわき市、西に郡山市と境を接し、北に田村郡船引町・大越町・滝根町、南に石川郡平田村という位置関係にある。町の東部に矢大臣山（964ｍ）、北西部に黒石山（896ｍ）・高柴山（884ｍ）、西部に一盃山（856ｍ）・日影山（879ｍ）、南西部に十石山（718ｍ）などの山々が所在し、隣接する市町村との境界を成している。

地形は、山頂緩斜面・山腹緩斜面や定高性山稜など阿武隈高地全体を覆う隆起準平原地形の特徴がみられ、小野町内では、大きく山地、丘陵地、埋積谷、河川に分類される。

山地は、浸食作用の影響が少なく比較的標高の高い上記の黒石山を含む南北に連なる各山々が北西部に位置し、町内の東部には唯一、矢大臣山が位置しているが、東部の山地については町外に連なる大滝根山や高塚山など千メートルを超す山々が存在する。

丘陵地は、阿武隈高地が断続的に隆起したために形成されたなだらかな起伏がみられる地形が浸食面の最高位にあって、地域別にみると北西域においては高度を増し、南東域では低い地形を呈している。段階的に形成されている丘陵面の最下位に当たる450～480ｍの高度を示すところには、右支夏井川流域を中心として形成されている。

埋積谷は、右支夏井川をはじめ町内の各河川の谷底と谷壁の境界が明瞭である上流部に沿ってみられ、谷幅は最大でも500ｍを超える平坦は確認されていない。

河川は、小野町の中心部を右支夏井川が南東方向に流下し、町の西側山地を水源とした車川・黒森川・十石川などの諸支流と合流する。なお、右支夏井川は、いわき市との行政区界付近で、阿武隈山系大滝根山、仙台平・高柴山・黒石山を結ぶ稜線を分水嶺として南流する夏井川本流と合流する。また、標高480～560ｍの丘陵地はこれらの小河川により開析され、丘陵裾部や谷底平野は集落や田畑として利用されている。本遺跡もこの谷底平野部に立地する。

地質は花崗岩類を主とした深成岩類を基盤層とし、一部現河床に沿う段丘上や埋積谷などに未固結の第四紀堆積物が分布している。深成岩類は北西端の黒石山周辺の狭い地域にはんれい岩、小野新町西部を除くほとんどの地域に分布する古期花崗岩類（片状花崗閃緑岩、黒雲母角閃石花崗閃緑

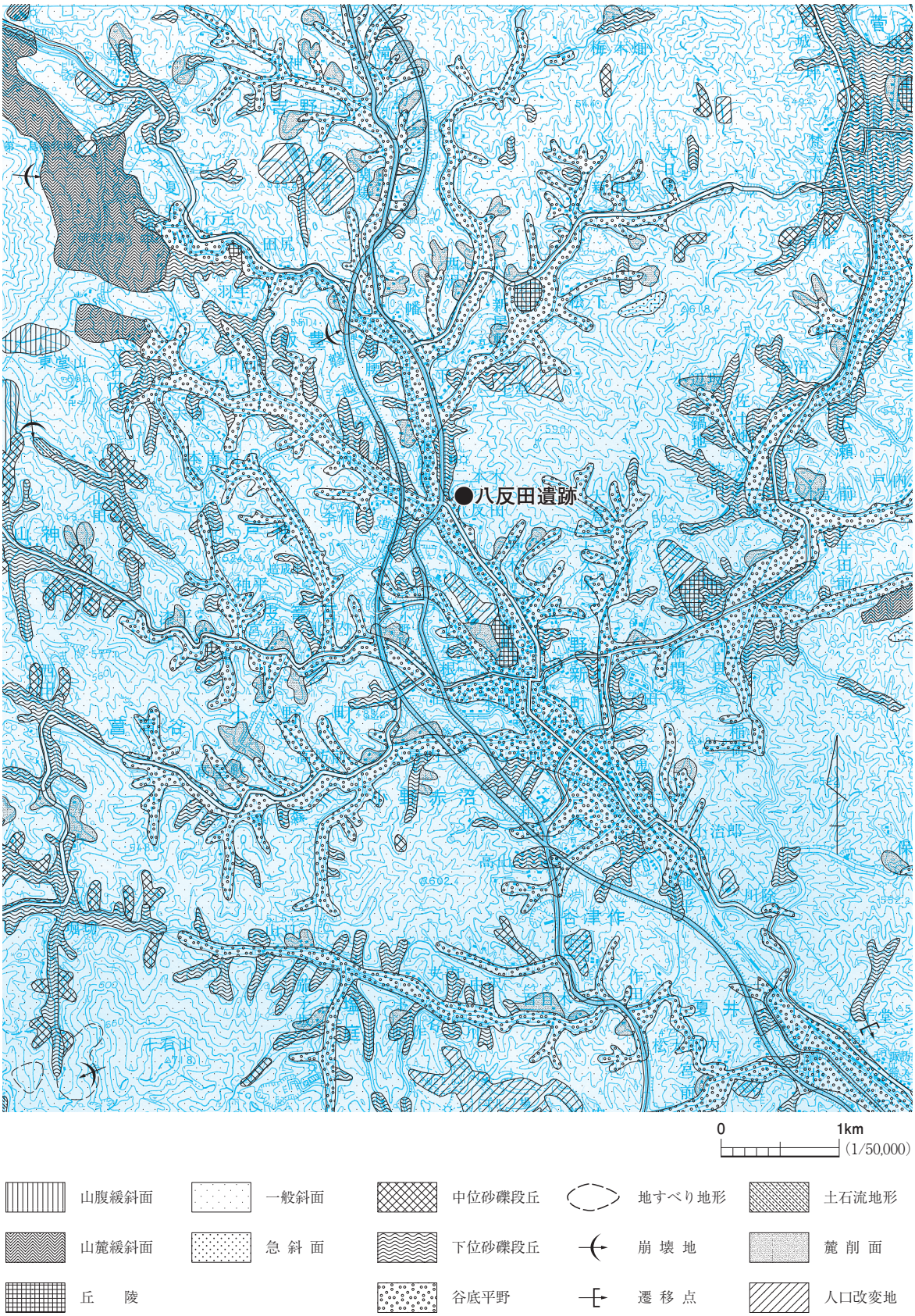

八反田遺跡
0
1km
(1/50,000)
山腹緩斜面
一般斜面
中位砂礫段丘
地すべり地形
土石流地形
山麓緩斜面
急斜面
下位砂礫段丘
崩壊地
麓削面
丘陵
谷底平野
遷移点
人口改変地

図2　周辺の地形分類図

岩)、町の北西部、日影から高柴山周辺に分布する新期花崗岩類(黒雲母花崗岩、桃色花崗岩)に大別される。未固結の第四期堆積物は、腐植土との漸移層である暗褐色土壌及び褐色火山灰層、帯黄褐色火山灰層などが認められる。

気候は内陸性気候にあたり、季節風の影響により変化に富んだ気候風土である。また、当地区は阿武隈高地内の内陸盆地であるため、年変化、日変化が大きく、春から夏にかけては、山間部特有のフェーン現象が起こることが多く、雷雨や降雹が発生し、冬季は、降雪は少ないものの、寒さは厳しく降霜や氷結が多い地域である。平成30年の年平均気温は11.6℃、年間降水量は、935.5㎜である。

小野町の位置する阿武隈高地の現在の植生は、落葉広葉樹林帯域の冷温帯夏緑広葉樹林帯の下部にあたり、温暖帯広葉樹林帯上部への推移地帯となっている。標高700ｍ付近を境として、山地にはミズナラ群落、丘陵や平地にはコナラ群落が発達している。林業も盛んな地域であるため、植林によるスギ等の常緑針葉樹林帯を形成しているが、当遺跡周辺は、概ねコナラ群落が繁茂する所謂里山の景観となっている。

第２節　歴 史 的 環 境

八反田遺跡の所在する田村郡小野町を中心に、1996年刊行『福島県遺跡地図』を参考に概観すると小野町町内に117ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が登録されている。その後の開発等に関連した調査において、福島県教育委員会および小野町教育委員会の調査により、今回の調査対象となった八反田遺跡を含め32遺跡が追加され149遺跡となっている。これらの遺跡の多くは標高430～500ｍの位置に分布し、夏井川とその上流である右支夏井川やその支流に沿って分布している。

時代別にみると縄文時代の遺跡が多く、奈良・平安時代の遺跡がそれに次ぎ、弥生時代・古墳時代の遺跡は少ない傾向が見られる。

町内には旧石器時代の遺構・遺物は確認されていない。縄文時代になると遺跡数が急増する。この中には、縄文時代草創期に属する御子柴型尖頭器(石槍)が出土した猪久保城跡、草創期前半の稲荷台式土器が出土した小滝遺跡・鴨ヶ館跡、日計押型文系土器が出土した柳作Ｂ遺跡がある。早期中葉では田戸下層式期や常世式期などの貝殻・沈線文系土器出土した小滝・糀内・長久保・柳作Ｂ遺跡・鴨ヶ館跡などがある。早期後半期になると鍛治久保・糀内・畑ヶ田・葭作遺跡や鴨ヶ館跡で土器片と共に竪穴住居跡などの遺構が発見されている。鍛治久保遺跡では茅山下層式期の竪穴住居跡、鴨ヶ館跡では大畑Ｇ式期の竪穴住居跡が検出されている。

縄文時代前期では小滝遺跡が挙げられ、大木２ｂ・４・６式期の東北系土器と浮島Ⅰ・Ⅲ式期と諸磯ｂ式期の関東系土器が出土している。このほか、鴨ヶ館跡では大木６式土器、鍛冶久保遺跡では浮島Ⅰ式や諸磯ｂ式期、柳作Ｂ遺跡では大木３式の竪穴住居跡と土坑・屋外炉と考えられる焼土遺構がそれぞれ発見されている。小野町内では、縄文時代早期中頃から前期前半にかけて比較的ま

とまって土器片が出土しており、この時期において福島県南部地域では、東北系土器と関東系土器とが混在する傾向がある。

縄文時代中期では町道建設に伴って平成３年に発掘調査が実施された矢大臣遺跡が代表的である。大木８ａ式期の大型竪穴住居跡、大木９式・10式期の竪穴住居跡と多量の遺物が出土した遺物包含層が調査され、反田Ｂ遺跡では大木９式期の埋設土器が確認されている。この他に堀切・清太郎遺跡では石囲炉と大木８ｂ式土器が出土している。

縄文時代後期から晩期にかけては矢大臣・猪久保・小滝・長久保・長賀遺跡があるが、遺跡数は減少傾向となる。矢大臣遺跡では綱取Ⅰ・Ⅱ式期の竪穴住居跡や配石遺構が確認され、猪久保城跡からは加曾利Ｂ式期、瘤付土器や土偶は長久保遺跡から出土している。長賀遺跡や梅ノ木畑遺跡では後期末葉から晩期初頭の良好な土器が出土している。晩期では長久保遺跡から大洞Ｂ式期の土器が出土し、反田Ｂ遺跡では大洞Ｃ２式期の竪穴住居跡、西田Ｈ遺跡からは掘立柱建物跡が発見されている。

弥生時代では、万景Ｂ・小滝・本飯豊・鍛冶久保・アセミタチＡ・Ｂ・沢目木・西田Ｈ・猪久保城跡・鴨ヶ館跡などで遺物が散見されが、この時期の竪穴住居跡や土坑などの明確な遺構は確認されていない。万景Ｂ遺跡では石包丁や籾圧痕付の土器片が、沢目木・西田Ｈ遺跡では前期の御代田式期、鴨ヶ館跡では中期龍門寺式から天神原式期の土器片が発見されている。

古墳時代の遺跡は、落合・安橋・本飯豊・万景Ｅ遺跡と大豆柄古墳群がある。このうち落合遺跡と本飯豊遺跡の発掘調査が実施されている。落合遺跡では古墳時代前期の大規模集落で、それに伴い良好な一括遺物や外来系の土師器が出土している。また、落合遺跡の北側に位置する本飯豊遺跡では古墳時代終末期の竪穴住居跡や畑地跡、土師器・須恵器の他に石製紡錘車・鉄製鍬などが出土している。付近には円墳群で構成される大豆柄古墳群が存在し、同一丘陵上に位置することから落合・飯豊の両遺跡との関係が窺われる。また、安橋遺跡では滑石製の有孔円盤や土製丸玉が表採されていることから、祭祀関係の遺跡であることが予想される。

奈良・平安時代では、落合・本飯豊・糀内・作田Ｂ・柳作Ｂ・Ｃ・鹿島・堂田Ａ・西田Ｈ・鍛冶久保・猪久保城・北ノ内・滝・小滝遺跡などの各遺跡で竪穴住居跡や掘立柱建物跡などの遺構が発見されている。この中には古墳時代から継続する落合・本飯豊遺跡、奈良時代から平安時代に継続する糀内・作田Ｂ・柳作Ａ・Ｃ遺跡、また平安時代に１～３軒の少数の竪穴住居で構成される堂田Ａ・西田Ｈ・鍛冶久保・猪久保城・北ノ内・滝・小滝・鹿島遺跡などがある。これまでの調査例から、集落の出現時期や構成・変遷について多種多様であることが確認された。この時期の小野町は、平安初期に編纂された『和名類聚抄』から陸奥国安積郡小野郷あったと推定されており、おそらく上記の遺跡などはその郷を構成していた集落跡と推察される。なお、福島県指定重要文化財に指定されている平安時代末期作の木造阿弥陀如来坐像と脇侍の三尊像が無量寺阿弥陀堂に安置されている。

中世においては、小野町周辺は小野保と呼ばれ、11世紀後半頃の平安時代後期に安積郡から分

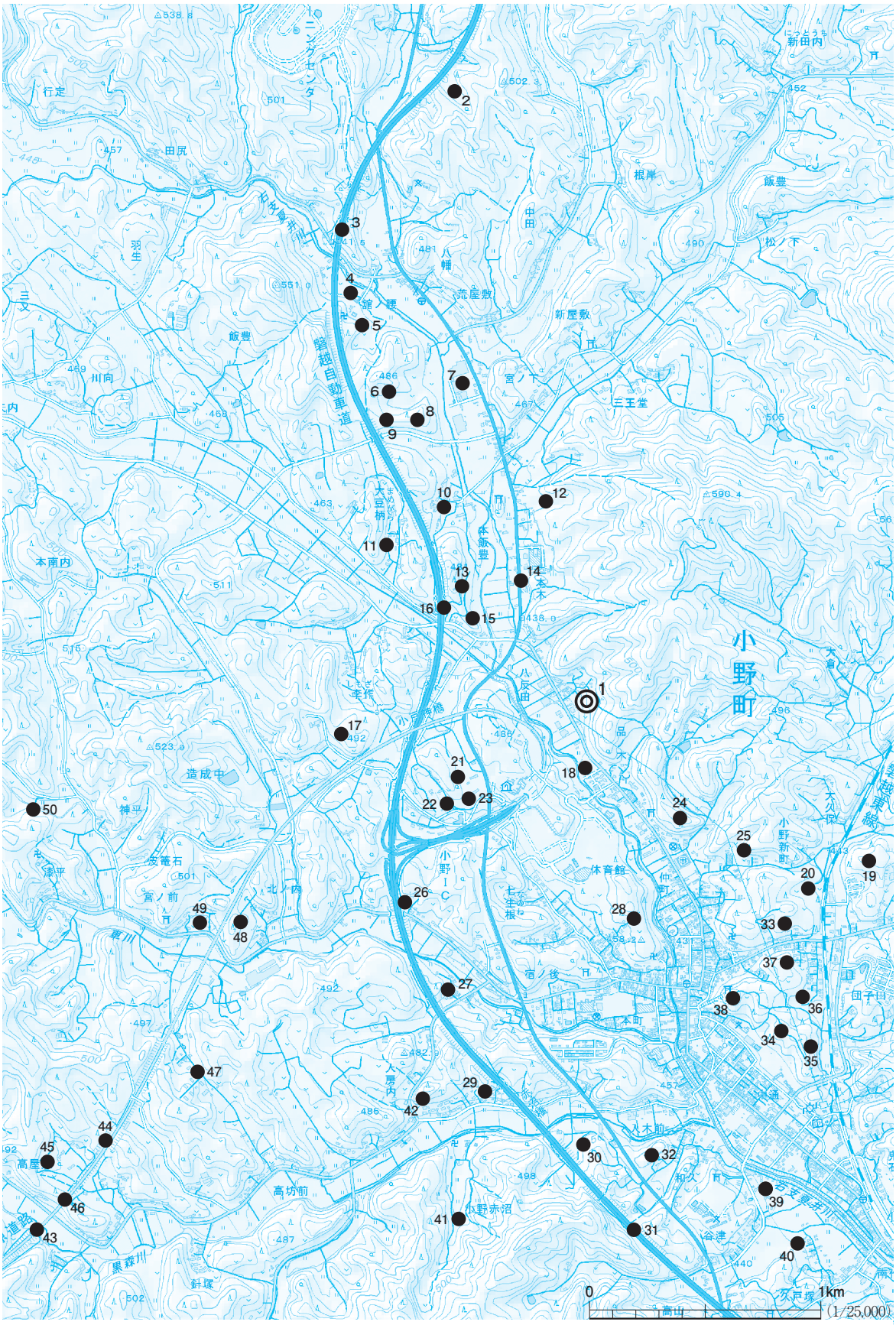


図3　周辺遺跡位置図

表１　周辺の遺跡一覧

№.	遺跡名	所在地	時　代	種　別
1	**八反田遺跡**	小野町小野新町字八反田	縄文・弥生・古墳	
2	関場遺跡	小野町雁股田字関場	縄文・奈良・平安	散布地
3	鴨ヶ館跡	小野町飯豊字舘ノ腰	縄文・弥生・平安・中世	城館跡・集落跡
4	切掛遺跡	小野町飯豊字切掛	奈良・平安	散布地
5	寺ノ下遺跡	小野町飯豊字寺ノ下	縄文・奈良・平安・近世	散布地
6	前久保遺跡	小野町飯豊字河沼・寺ノ下	縄文・古墳～平安	散布地
7	柿人遺跡	小野町飯豊字柿人	縄文・古墳～平安	散布地
8	作田Ａ遺跡	小野町飯豊字作田	奈良・平安	散布地
9	作田Ｂ遺跡	小野町飯豊字作田	奈良・平安	散布地
10	本飯豊遺跡	小野町飯豊字本飯豊	奈良・平安・近世	集落跡・墓跡
11	月清水遺跡	小野町飯豊字大豆柄	奈良・平安	散布地
12	一杯森遺跡	小野町飯豊字一杯森	奈良・平安	散布地
13	大豆柄古墳群	小野町飯豊字大豆柄	古墳	古墳
14	二本木遺跡	小野町飯豊字二本木	古墳～平安	散布地
15	蔦ノ本遺跡	小野町飯豊字蔦ノ本	奈良・平安	散布地
16	李作遺跡	小野町皮籠石字李作	奈良・平安	散布地
17	落合遺跡	小野町皮籠石字落合	古墳～平安	集落跡
18	小白井遺跡	小野町小野新町字小白井	平安・近世	散布地
19	大倉館跡	小野町小野新町字大倉	中世	城館跡
20	団子田遺跡	小野町小野新町七合田	奈良・平安	散布地
21	馬番遺跡	小野町小野新町字西馬番	奈良・平安	散布地
22	西馬番遺跡	小野町小野新町字馬番・七正根	奈良・平安	散布地
23	七生根遺跡	小野町小野新町字七正根	奈良・平安	散布地
24	槻木内館跡	小野町小野新町字小太内	奈良・平安	散布地
25	槻木内遺跡	小野町小野新町字槻木内	中世	城館跡
26	糀内遺跡	小野町小野新町字糀内	奈良・平安	集落跡
27	五百成遺跡	小野町籠石字五百成	奈良・平安	散布地
28	小野城跡	小野町小野新町字小白井・美売	中世	城館跡
29	関根前遺跡	小野町小野赤沼字関根前	奈良・平安	散布地
30	西作遺跡	小野町小野赤沼字西作	奈良・平安	散布地
31	猪久保城跡	小野町谷津作字和久・猪久保	縄文・弥生・奈良・中世	城館跡
32	宮ノ下遺跡	小野町小野赤沼字宮の下	古墳～平安	散布地
33	丹後坂遺跡	小野町小野新町字丹後坂	奈良・平安	散布地
34	万景Ａ遺跡	小野町小野新町字万景上	弥生・奈良・平安	散布地
35	万景Ｂ遺跡	小野町小野新町字万景上	弥生	散布地
36	万景Ｃ遺跡	小野町小野新町字前久保	弥生～平安	散布地
37	万景Ｄ遺跡	小野町小野新町字前久保	弥生～平安	散布地
38	万景Ｅ遺跡	小野町小野新町字万景	古墳・奈良	散布地
39	安橋遺跡	小野町谷津作安橋	古墳～平安	散布地
40	久戸塚遺跡	小野町谷津作字峰が先	古墳～平安	散布地
41	入房内遺跡	小野町小野赤沼字坊入	古墳・奈良	散布地
42	石崎遺跡	小野町小野赤沼字西ノ内	奈良・平安	散布地
43	反田遺跡	小野町菖蒲谷字反田・鹿島	縄文	散布地
44	柳作Ａ遺跡	小野町菖蒲谷字北ノ内・柳作	奈良・平安	集落跡
45	柳作Ｂ遺跡	小野町菖蒲谷字柳作	縄文・近世	集落跡
46	柳作Ｃ遺跡	小野町菖蒲谷字北ノ内・柳作	奈良・平安・近世	集落跡
47	四朗坊遺跡	小野町小野赤沼字四朗坊	奈良・平安	散布地
48	宮ノ前遺跡	小野町皮籠石字宮ノ前	古墳～平安	散布地
49	北ノ内遺跡	小野町皮籠石字北ノ内	平安・近世	集落跡
50	神平遺跡	小野町皮籠石字神平	縄文	散布地

かれたものと思われる。記録上の初見は建武２年(1335年)であり、陸奥国守北畠顕家が結城親朝に宛てた陸奥国についての国宣案において「小野保」として記載されている。ただし、その頃の領主などを伝える史料がほとんどなく不明な点が多く、僅かに残っている史料から推測するにすぎない。これ以後、白川結城・石川・三春田村・相馬・岩城・伊達各氏などの攻防が繰り返され、概ね15世紀初頭まで白川結城氏、その後三春田村氏、天正17(1589)には伊達政宗が支配するようになる。その後の豊臣秀吉による奥州仕置き以後、田村郡は蒲生氏郷に宛がわれて会津領となり、慶長３年以降は上杉景勝の支配地となる。

この時期の代表的な城館跡の発掘調査には猪久保城跡と鴨ヶ館跡がある。猪久保城跡の調査報告では、時期が限定できる居館型山城で、15世紀前半に自焼により破却されたと推定されている。鴨ヶ館跡は郡山と三春方面への分岐点に位置し、15世紀後半から16世紀前半まで機能していたと考えられている。

近世以降は蒲生氏・丹羽氏・松平(奥平)氏・松平(結城)氏・越後高田藩や幕府領・磐城平藩・笠間藩・新発田藩などの預かり地となった。発掘調査された鍛冶久保遺跡では18世紀末から19世紀前葉の建物跡や窯跡が発見されている。

明治期には町村合併(明治22年)により小野新町村(旧六村合併；小野新町・皮篭石・谷津作・菖蒲谷・小野赤沼・雁股田)、飯豊村(旧六村合併；飯豊・浮金・吉野辺・小野山神・小戸神上・小戸神下)、夏井村(旧六村合併；塩庭(２村合併；小塩・下羽出庭)・上羽出庭・南田原井・北田原井・和名田・湯沢)となり、昭和30年には上記１町２か村の合併により小野町が誕生した。

引用・参考文献

小野町　1987『小野町史　資料編Ⅰ(上)』
小野町　1987『小野町史　通史編』
福島県農林資産部農地計画課　1996『土地分類基本調査；小野新町』
小野町教育委員会　1998『こまちダム関連遺跡群分布調査報告書』
福島県教育委員会　2000『福島県内遺跡分布調査報告６』
福島県教育委員会　2001『福島県内遺跡分布調査報告７』
福島県教育委員会　2002『福島県内遺跡分布調査報告８』
福島県教育委員会　2003『福島県内遺跡分布調査報告９』
福島県　2018『福島県現住人口調査月報』

第３節　遺跡の位置と周辺地形

八反田遺跡は、田村郡小野町大字小野新町字八反田に所在する。商業施設および官公署の集中する小野新町地区は、国道349号線・磐越自動車道・ＪＲ磐越東線がそれぞれ南北に走り、あぶくま高原道路が西南方向の矢吹町まで延伸している。磐越自動車道小野インターチェンジは、磐越自動車道・あぶくま高原両道路の出入り口として当地区に設けられ、ＪＲ磐越東線小野新町駅は小野新町地区の南側に当たる谷津作地区に設けられている。

遺跡の所在する八反田地区は、小野新町北部に位置し、北が飯豊、東が田村市滝根町広瀬地区に接し、国道349号坂東内交差点から南へ400ｍ、小野町役場から直線距離で約１㎞の県道65号小野郡山線沿にある。

遺跡周辺の地形を概観すれば、東側の残丘群周辺には森林が広がり、耕地や集落が少なく、町内の中心部を流下する右支夏井川に面した丘陵の南斜面は樹枝状に広がる谷の存在が多く、いずれも比較的広い谷底平野を形成している。八反田遺跡もこの谷底平野に位置しており、東側に控える小丘陵の斜面中位から上位部にかけては、宅地および畑地となっており、斜面裾部から平坦部に至る所は、水田として利用されている。本遺跡と東側の丘陵の比高差は約65ｍあり、舌状に張り出した丘陵に挟まれる地形で、部分的に比較的険峻な斜面も存在する。また、県道側にある用水路付近

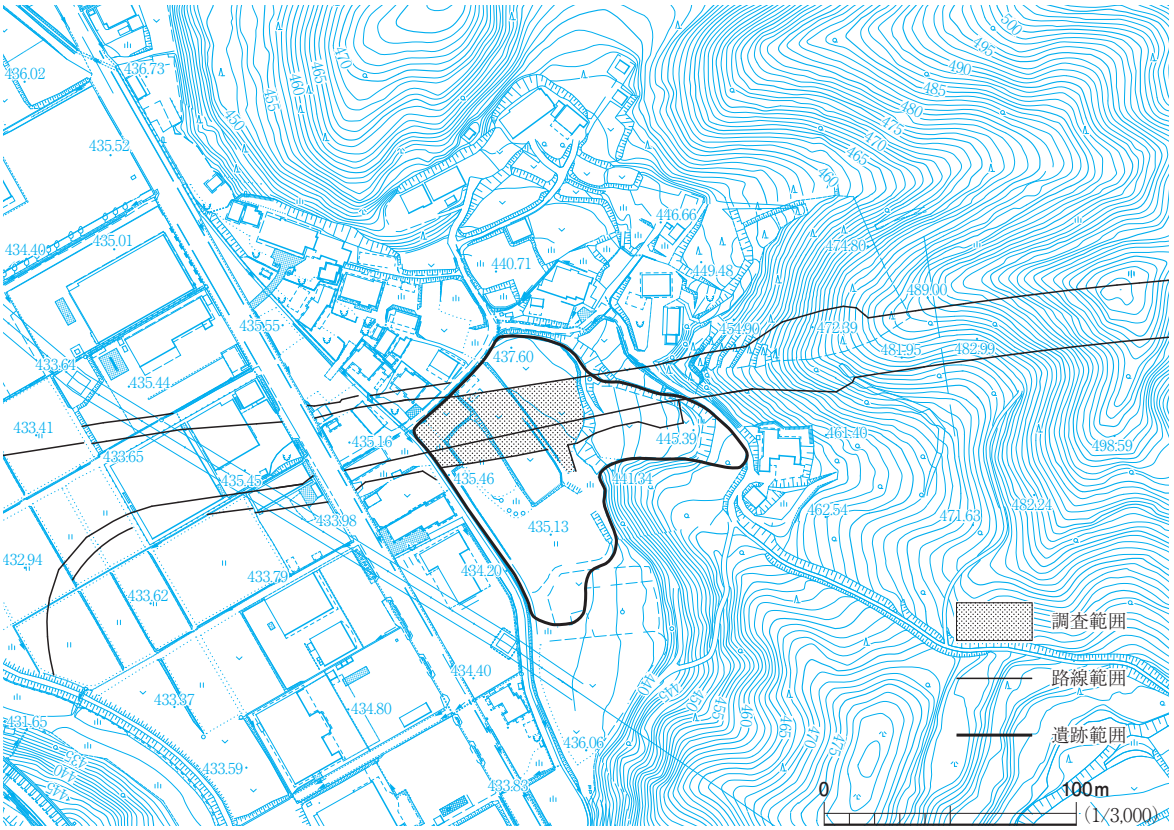


図４　遺跡の位置と周辺地形

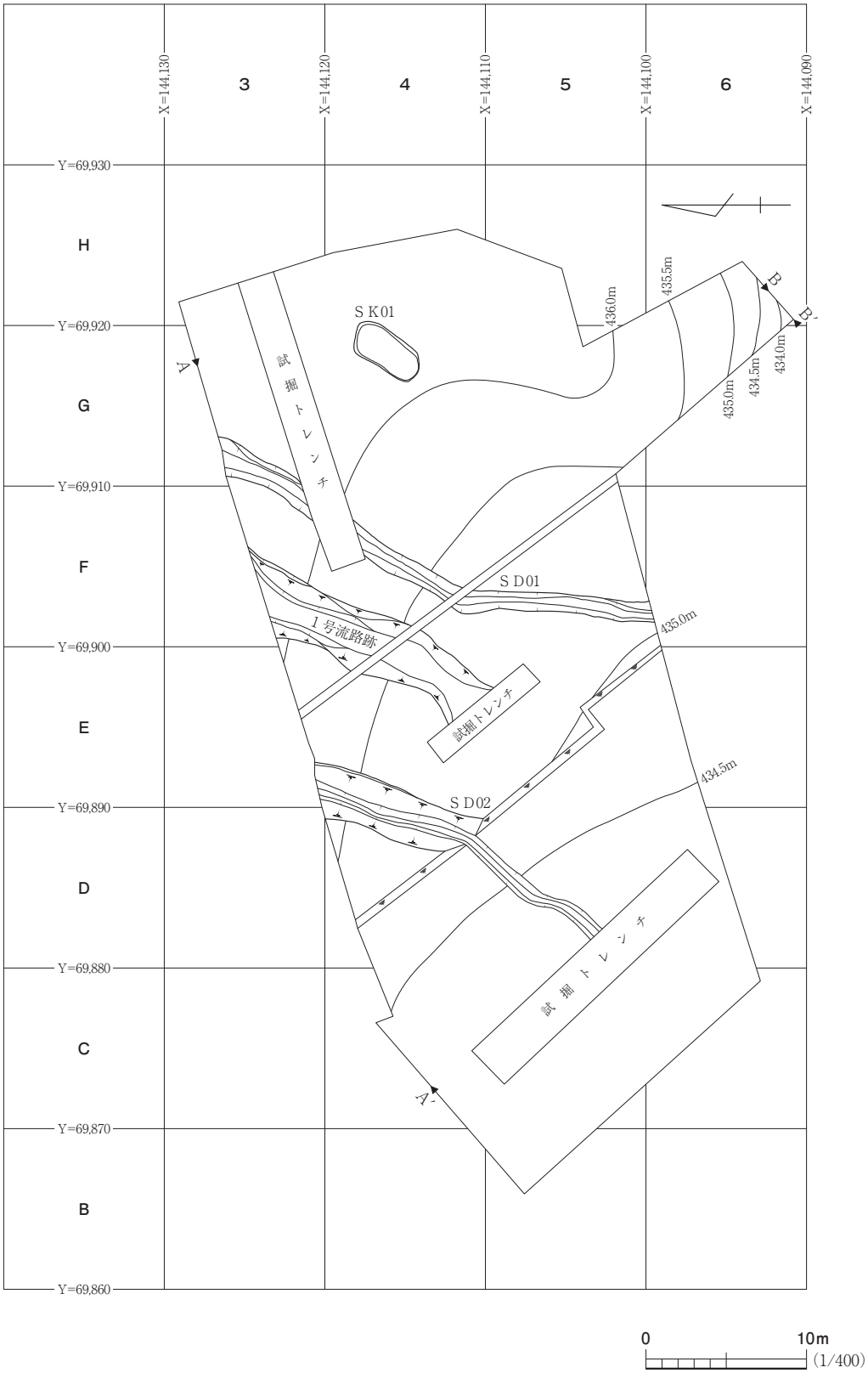

X=144.130
3
X=144.120
4
X=144.110
5
X=144.100
6
X=144.090
Y=69.930
H
Y=69.920
G
Y=69.910
F
Y=69.900
E
Y=69.890
D
Y=69.880
C
Y=69.870
B
Y=69.860
S K01
試掘トレンチ
A
A'
B
B'
436.0m
435.5m
435.0m
434.5m
434.0m
S D01
1号流路跡
435.0m
試掘トレンチ
434.5m
S D02
試掘トレンチ
0
10m
(1/400)

図5　遺構配置図

は、用水路改修等の掘削がおよび大きく削平されている。

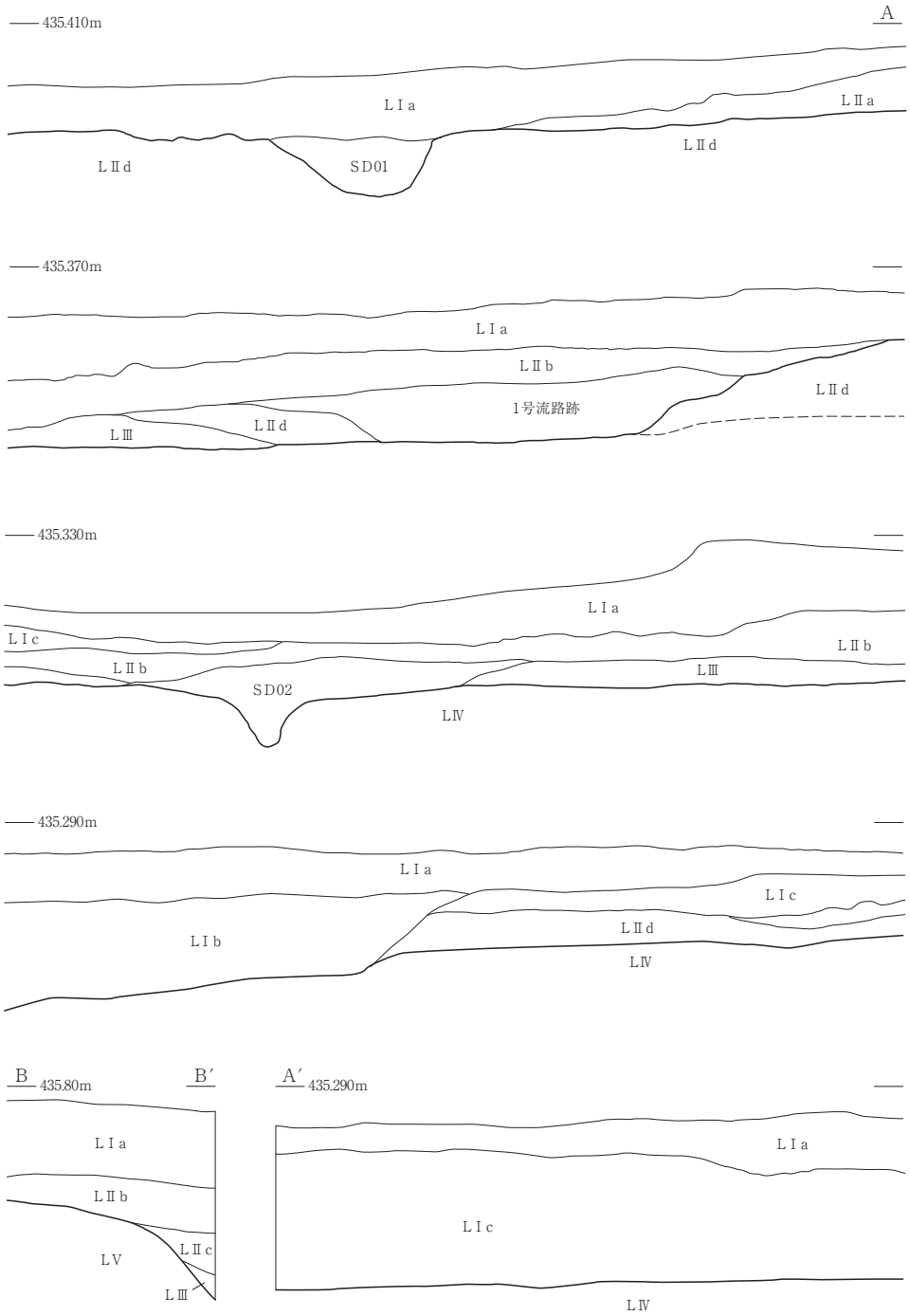
調査区の東側端部は標高435.2ｍで、西側端部は433.7ｍを測る。調査区内の比高は約1.5ｍである。

第４節　基 本 層 位

遺跡の遺構外堆積土は、表層から基盤層までを５層に分けた。ほぼ調査区全域に共通する土層であるが、調査区南側の一部に突出しているＧ６・Ｈ６グリッドでは、ＬⅣが認められない。なお、基盤面であるＬＶはＦ５・Ｇ５・６・Ｈ５・６グリッドで確認されるが、それ以外では極めて深い部位に位置するものと考えられ、確認に至っていない。

ＬＩａは現耕作土であり、しまりのないにぶい黄褐色土である。全体的に50㎝前後の厚さで調査区全域を覆っている。ＬＩｂは調査区西側域に認められ、１ｍ以上の層厚を測る。現在の耕作地造成の際に湿地部を埋め立てるために客土されたものである。ＬＩｃは黒色砂質土であり、旧耕作土の一部が残ったものと判断した。ＬⅡａは主に調査区東側に認められ、25㎝前後の層厚を測る。にぶい黄褐色砂質土が混在し、わずかに遺物が出土する。ＬⅡｂは黒色砂質土であり、概ね調査区東側より中央部にかけて認められる。全体的に白色砂粒を混在し遺物が出土する。ＬⅡｃは南側のＧ６・Ｈ６グリッドで確認された黒褐色砂質土である。白色砂粒を含む。ＬⅡｄは東側丘陵裾部から調査区中央部まで認められる黒色砂質土であり、遺構検出面となる。遺物の出土はない。ＬⅢはか褐灰色砂であり、主に調査区中央部に認められる。ＬⅡｄに連続し遺構検出面となる。ＬⅣは黒褐色粘質土で突出した調査区南端部以外の調査区全域で確認できる。ＬＶは黄褐色砂質土である。

八反田遺跡で検出された遺構は、土坑１基、溝跡２条、自然流路跡１条である。谷底平野に至る谷筋から発見されており、軸方向が全て同一である。



基本土層

ＬＩａ　にぶい黄褐色土　10YR4/3
ＬＩｂ　黒褐色砂質土　7.5YR3/1
ＬＩｃ　黒褐色土　10YR3/2
ＬⅡａ　褐色砂質土　10YR4/6（にぶい黄褐色砂質土が混在）
ＬⅡｂ　黒褐色砂質土　7.5YR1.7/1（白色砂粒を混在（遺物出土層））
ＬⅡｃ　黒褐色砂質土　7.5YR2/2（白色砂粒を多く混在）
ＬⅡｄ　黒色砂質土　7.5YR2/1（褐灰色砂が多く混在する）
ＬⅢ　褐灰色砂　10YR4/1
ＬⅣ　黒色粘質土　7.5YR1.7/1
ＬＶ　黄褐色砂質土　10YR5/6

0　2m（1/80）

図６　基本土層

第３章　遺 構 と 遺 物

第１節　　土　　坑

１号土坑　ＳＫ01（図７、写真３）

本土坑は調査区東部のＧ４・Ｈ４リッドに位置し、開析された谷部の丘陵側に立地する。遺構検出面はＬⅡｄの黒色砂質土である。

平面形は不整楕円形を呈し、長軸は北東から南西方向の谷筋方向と一致する。周壁は緩やかに立ち上がるが、南西側の壁については、わずかな形跡を止めるのみである。規模は長軸が4.5ｍ、短軸が2.2ｍ、深さが最大で15㎝を測る。遺構内堆積土は炭化物粒及び炭化物塊と焼土粒を混入する黒褐色土の単層で、自然堆積土と判断した。北東側の壁際には、当遺構の埋没過程で流入した焼土塊が確認された。なお、検出当初はその規模から住居跡と想定し精査を行ったが、遺構内外から住居跡と判断出来得る柱穴等の施設が見つからず土坑と判断した。

出土遺物が無く、性格及び機能時期は不明であるが、周囲からの出土遺物が弥生時代もしくは古墳時代前期のものであることから、当該時期に機能したものと推察される。

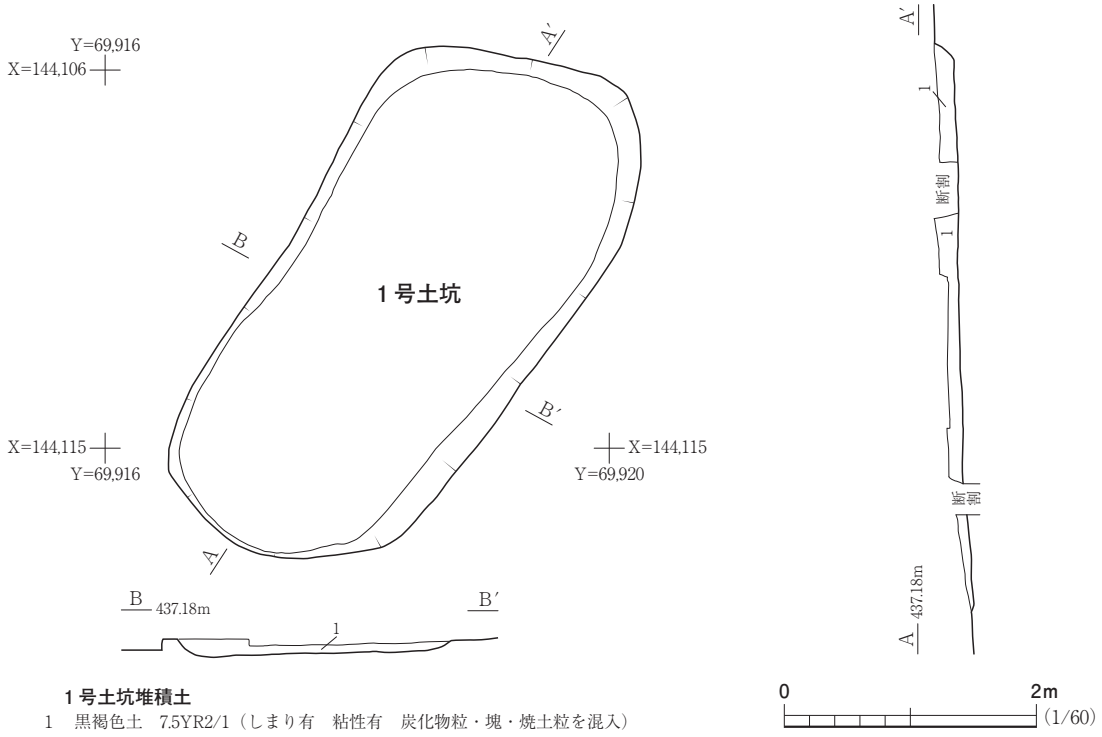


図７　１号土坑

第２節　　溝　　跡

１号溝跡　ＳＤ01（図８、写真４）

本遺構は、調査区中央からやや東寄りのＦ３・４・５、Ｇ３グリッドに位置し、ＬⅡｄで検出された。２号溝跡とほぼ７ｍの間隔を持って並行する。形状は中央部でわずかに屈曲し、規模は全長が28.5ｍを測る。屈曲部を境に北側が17ｍ、南側が11.5ｍを測り、幅は1.0～1.3ｍ、検出面からの深さは北端部で56㎝、中央部で41㎝、南端部で19㎝である。底面の標高差は、北側端部と南端部で約１ｍを測る。断面形はＵ字型を呈し、底面は平坦である。

遺構内堆積土は６層から成る自然堆積土である。ℓ１～ℓ３は黒色を基調とし、やや標高の高い東側からの流れ込みの様相を呈している。ℓ４～ℓ６は褐色系を基調とし、いずれも砂および砂質土であることから、水流による堆積と判断した。

出土遺物はℓ１・２より縄文が施されている土器片と土師器片が出土している。いずれも摩滅した小片のため図示はしていない。ただし、試掘調査において、弥生時代中期頃の土器が遺構検出面より出土している。

本遺構は、南北方向の谷筋に沿った溝跡であり、端部はいずれも調査区外に延びる。本来は東側丘陵裾に沿い蛇行しながら谷中段部に延びているものと推察される。なお、谷中位より上方では、幾分急傾斜となるため溝跡の連続性が想定し難い。本遺構は、谷中段部にある湧水点からの流水痕跡を基に掘り込み、溝跡として使用したものと考えられる。用途としては、用水を目的としたもの

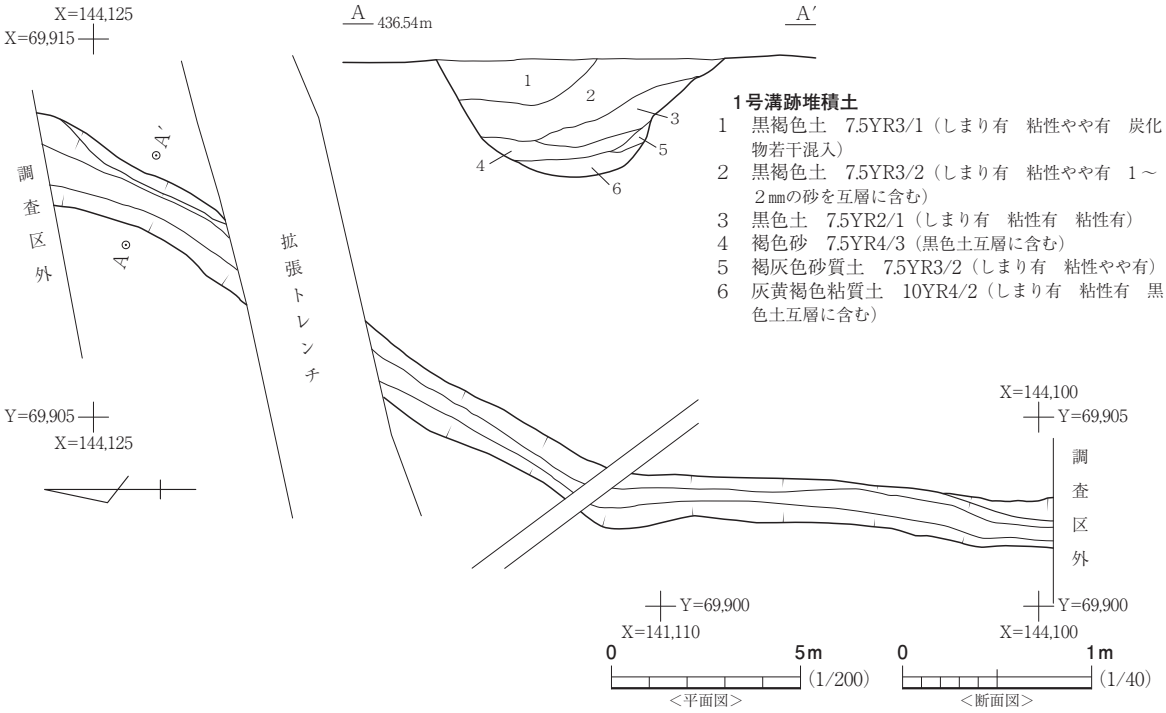


図８　１号溝跡

と推定できる。機能時期は、出土遺物から弥生時代中期から古墳時代頃と推察される。

２号溝跡　ＳＤ02（図９、写真５）

本遺構は、調査区中央からやや西寄りのＤ４・５、Ｅ３・４グリッドに位置し、ＬⅢ上面からＬⅣ上面で検出された。１号溝跡が東側に約７ｍの間隔を持って並行する。形状はわずかに蛇行するが直線的である。溝跡のほぼ中央部から南西側は大きく後世の削平を受けている。また、南西端部は試掘トレンチにより切断され形状が不明である。ただし、トレンチの対壁側には溝跡の痕跡が認められないことから、ほぼ端部付近であったものと推察される。規模は全長が20ｍを測り、幅は削平を受けていない部分で約３ｍ、深さが約90㎝を測る。削平を受け段差が生じている部分から南側は幅が１ｍ前後、検出面からの深さが約50㎝を測る。底部の標高差は北側端部と南端部で約85㎝を測り、断面形は底部から中段域までＵ字型を呈し、上部に向い大きく開く形状を呈する。底面は平坦である。

遺構内堆積土は６層からなる自然堆積土である。ただし、埋没の過程は概ね３時期に捉えることができる。最下層のℓ６は断面形がＵ字型を呈する部分に堆積し、水流により一気に埋没した様相を呈する。中層のℓ３～ℓ５も水流による堆積土であるが、溝として機能した時期が比較的長かったものと推察される。上層の２層は、一気に堆積したものと推察される。以上のことから埋没過程には時間差が窺えるが、遺構内からの出土遺物は無く詳細な時期は不明である。

本遺構は、１号溝跡同様南北方向の谷筋に沿った溝跡であり、北側端部は調査区外に延びる。本遺構が延伸すると思われる所は、傾斜地が平坦部に移行する部分にあたり、本溝跡の連続性が考えられる。本溝跡の用途としては、１号溝跡と同様に用水に関わる溝跡と推察される。

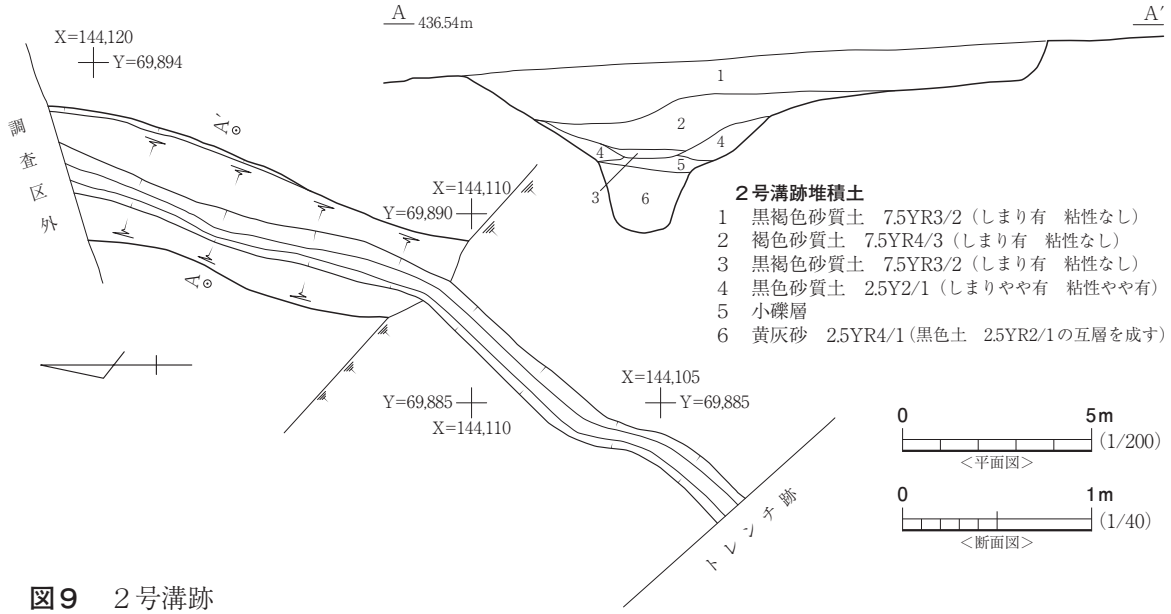


図９　２号溝跡

第３節　自 然 流 路 跡

１号流路跡（図10・11、写真６・７）

本遺構は、調査区中央のＥ４・５、Ｆ３・４グリッドに位置し、ＬⅡｄ上面で検出された。１号溝跡と２号溝跡の間に位置している。重複関係は認められない。南西端部は試掘トレンチにより切断され形状が不明であるが、トレンチの対壁側には溝跡の痕跡が認められないことから、概ね流路の端部と考えられる。形状は直線的であり、規模は全長が約15ｍ、幅がは3.2ｍを測る。深さが最深部で70㎝を測り、南端部に向かうほど浅くなる。底部は平坦で、東西の壁は比較的緩やかな立ち上がりを呈している。

遺構内堆積土は５層からなる自然堆積土である。ℓ４・５は比較的緩やかな水性堆積が認められ、ℓ４堆積後に本溝跡が埋没していく過程で２筋程度の流路を形成している。最終的にはℓ１が一気に堆積し終焉を迎えている。

遺物は、５層の堆積土のうちℓ２～ℓ４の３層から縄文土器・弥生土器・土師器の破片が出土している。図11－１・２は縄文土器の口縁部片である。１は縄文時代後期の内湾する深鉢であり、縄文施文後に平行する沈線が３条施される。２は縄文時代晩期の粗製土器で波状口縁を有する複合口縁である。３は縄文時代後期後葉の高坏脚部であり、縄文を施文後に横位の太い沈線を施している。４～８は口縁部に撚糸文が施された破片である。４は一本引きの沈線が施される。５は地文として束線具による横位の細い沈線が施されている。

９～17は土師器片である。９は二重口縁壺の口縁部破片である。屈曲部位から外反して立ち上

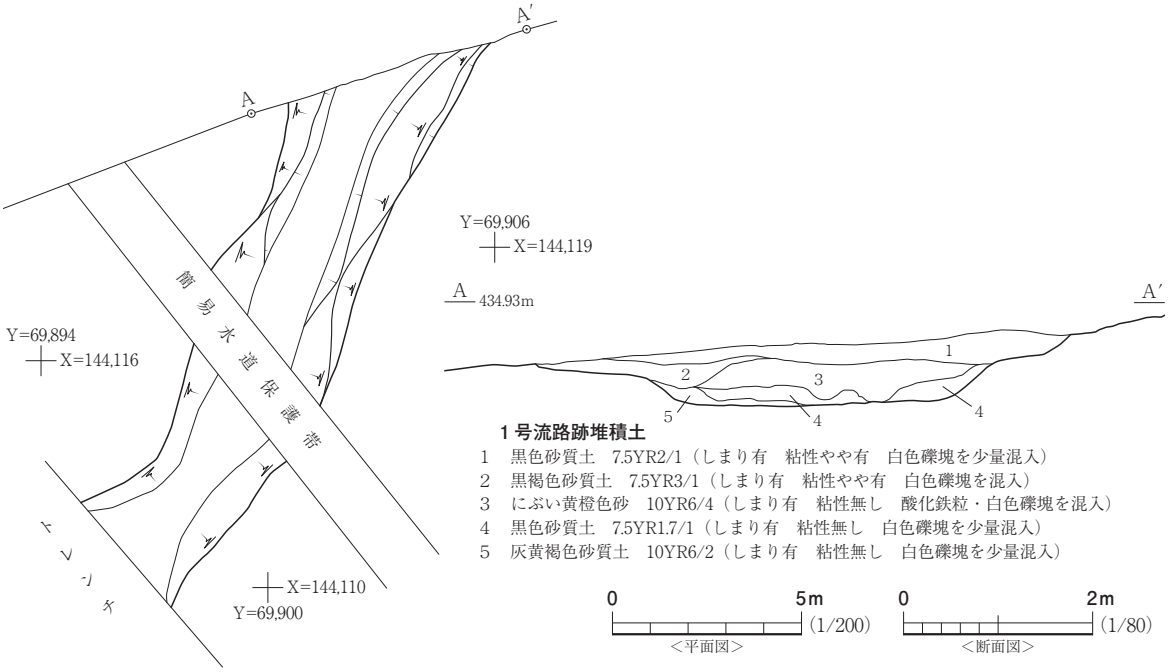


図10　１号流路跡

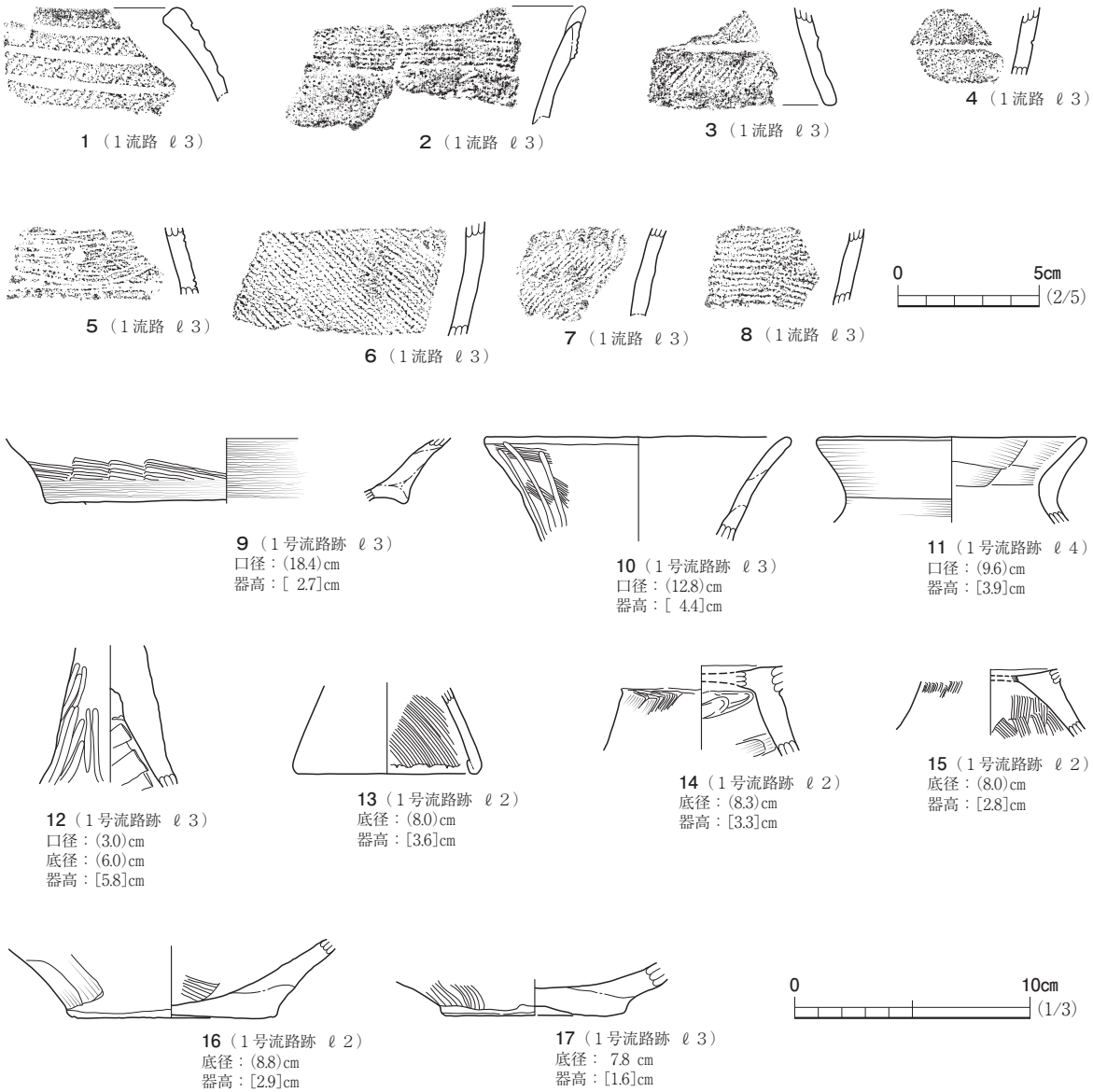


図11　1号流路跡出土遺物

がり、口唇部は欠損する。外面の整形痕はハケメ痕であり、口縁部下端にはナデ調整が施される。内面の整形痕はナデが認められる。10は壺の口縁部破片である。外反する口縁部で、整形痕としてヨコナデ後に間隔の広い縦位のミガキが施されている。11は小型甕の体部上半から口縁部の破片である。口縁部はわずかに外反する。口縁部の内外面にはヨコナデ、体部にはハケメが認められる。12は高坏の脚部破片である。上半部が中実をなし、脚端部に向かってラッパ状に開く。外面には縦位のミガキ、内部にはヘラナデが認められる。13～15は台付甕の脚部破片である。13は内面にハケメが認められる。脚端部が折返して作られる。14・15は外面にハケメ、内面にナデ・ハケメが認められる。16・17は甕の底部破片であり、底部外縁が環状を呈する。

本遺構は、1.2号溝跡同様南北方向の谷筋に沿った自然流路跡であり、北側端部は調査区外に延びる。谷部下方となる調査区の堆積土を概観すると、扇状に広がる堆積の様相が見てとれ、谷の

崩落土が広い範囲で発生していたと推察される。最終的には、この流路跡が谷部央部の最も深い自然流路として形成されていたものと考えられる。機能時期は、出土遺物から古墳時代以前と視察される。

第４節　遺構外出土遺物（図12、写真８）

遺構外出土土器は、総数で650点出土している。内訳は判別不能なものを除き、縄文土器32点、弥生土器68点、土師器290点、須恵器１点、陶磁器６点である。

グリッド別では、溝跡および自然流路の位置するＤ４～Ｆ４グリッドの出土量が多い。いずれも縄文土器・弥生土器片に比して土師器片の出土量が多い。その他のグリッドにおいても同様な傾向である。陶磁器類は、ＣグリッドＬＩｃからの出土であり、後世の削平が広範囲に及んでいる部分である。また、等高線が入り込み緩い谷地形を呈するＦ５・Ｇ５グリッドも遺物の出土量が多い。

図12－１は縄文時代晩期の複合口縁となる粗製深鉢である。２～14は弥生土器である。２は甕の体部上端部にあたり、結節縄文が施文され、３は間隔が広い撚糸文が施されている。４は鉢形土器で一本描きによる重菱文が描かれている。重菱文の内部には浅い撚糸文が充填されている。５・９は体部破片であり、異間隔の二本同時施文による平行沈線（５）や重菱文（９）が認められる。６～８・10は一本引きによる沈線文が施されている。渦巻文（６）、重菱文（８）が認められる。11は櫛歯状工具による重菱文を施した壺形土器資料である。12・13は甕または壺の体部下半の破片であろう。地文として縄文が施される。

14～19は古墳時代前期に属する土師器である。14は北陸系の小型甕の口縁破片である。口縁部は直立し内外面に段を持つ。外面に擬凹線が施される。内面はヨコナデを施している。15～17は甕の破片である。15は体部上半から口縁部の破片で、口縁部は僅かに外反する。口縁部の整形痕として内外面ともにヨコナデが認められる。体部にはわずかではあるがハケメの痕跡が残る。18は高坏の脚部破片である。上半部が中実をなし脚端部に向かって大きく開く。整形痕として内外面ともにヘラナデが認められる。19は甕の底部破片である。中央部が窪み内外面共にヘラナデが認められる。胎土が14に極めて似ていることから同一個体の可能性がある。

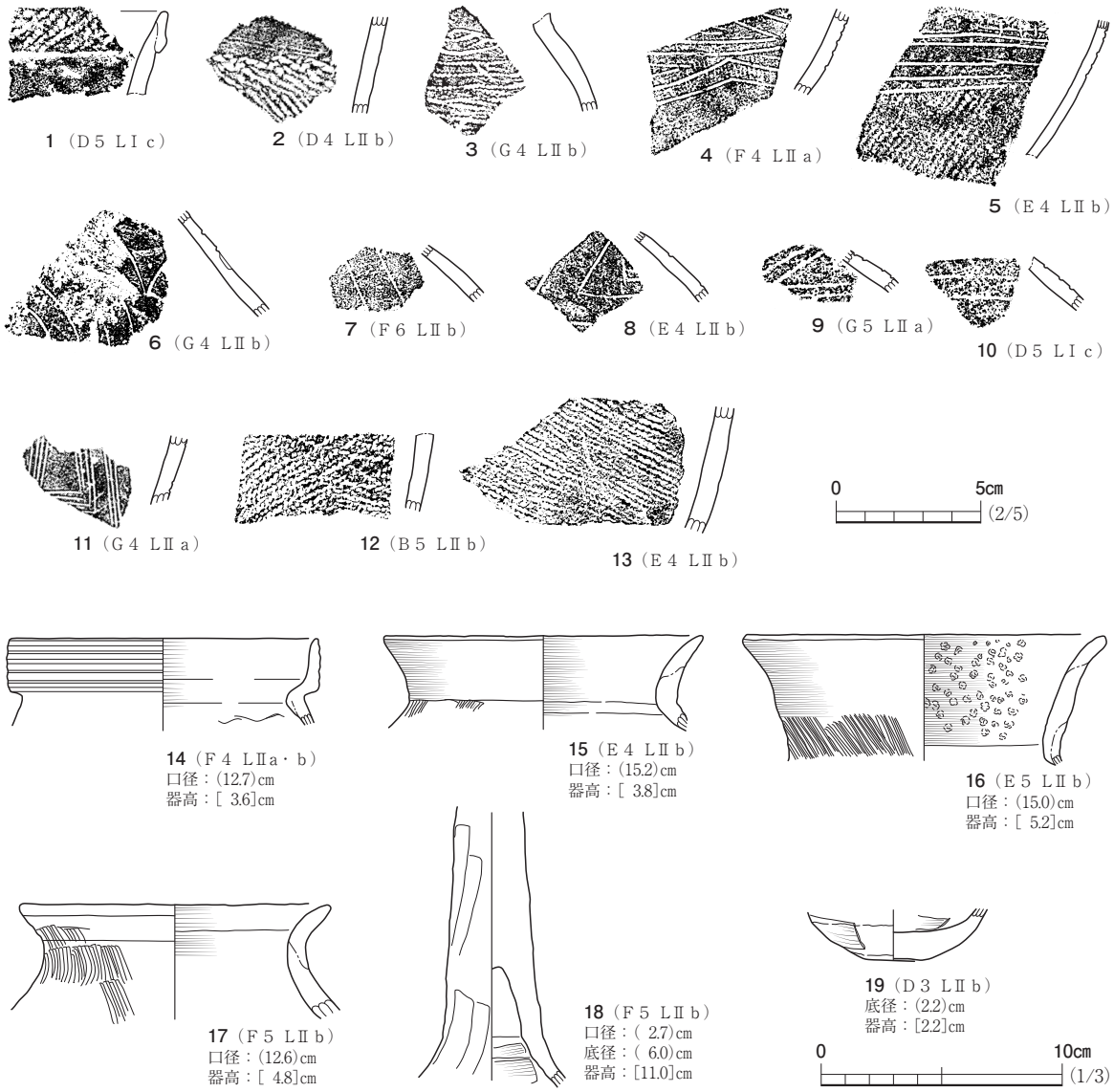

1（D５ LⅠc）
2（D４ LⅡb）
3（G４ LⅡb）
4（F４ LⅡa）
5（E４ LⅡb）
6（G４ LⅡb）
7（F６ LⅡb）
8（E４ LⅡb）
9（G５ LⅡa）
10（D５ LⅠc）
11（G４ LⅡa）
12（B５ LⅡb）
13（E４ LⅡb）
0
5cm
(2/5)
14（F４ LⅡa・b）
口径：(12.7)cm
器高：[3.6]cm
15（E４ LⅡb）
口径：(15.2)cm
器高：[3.8]cm
16（E５ LⅡb）
口径：(15.0)cm
器高：[5.2]cm
17（F５ LⅡb）
口径：(12.6)cm
器高：[4.8]cm
18（F５ LⅡb）
口径：(2.7)cm
底径：(6.0)cm
器高：[11.0]cm
19（D３ LⅡb）
底径：(2.2)cm
器高：[2.2]cm
0
10cm
(1/3)

図12　遺構外出土遺物

第４章　ま　と　め

今回の調査では、土坑１基、溝跡２条、自然流路跡１条が検出された。出土遺物が最も多い１号流路跡（自然流路）では、縄文時代後期・晩期、弥生時代中期から古墳時代前期の土器片を中心として、縄文土器片32点、弥生土器68点、土師器290点、須恵器１点、陶磁器６点であり、摩滅が著しく詳細な時期は不明とした遺物が253点出土している。ここでは調査において明らかとなった遺構・遺物の特徴を大枠の時期の中で概観し、調査のまとめとしたい。

八反田遺跡は、丘陵南側の裾部に広がる谷底平野に立地している。谷頭は比較的急な斜面を有する丘陵の中段より発生し、現在の右支夏井川方向の低地部に至る。調査前現況は、丘陵裾側が畑地・河川側が水田である。調査の成果からも河川側に限り、谷地地形であることが確認されたことから、土地利用の観点からは、当遺跡が機能した弥生時代から古墳時代においても食物生産等に使用されていたものと想定できる。発見された溝跡等が水路として機能していたと想定すれば、当地区が、弥生時代中期から古墳時代前期頃に人の生活圏の一部を形成していたと推定できよう。また、これらの遺物の給源については、調査区の北側から東側に続く丘陵地に集落等が存在する可能性が指摘できる。

なお、古墳時代前期において、有段口縁に明瞭な沈線を施す所謂疑凹線文をもつ北陸系の土器の存在があり、阿武隈高地の山間部に位置する当遺跡における地域間の交流を示すものと考えられる。当該期の特徴として、太平洋側と日本海側の連絡に不可欠な内陸の山間部集落が交流の結節点となり、内陸部の集落が海上交通網の網目に加わることができたといった指摘がされており（柳沼2012）、当遺跡の近くに存在するであろう集落跡もまた同様な性格を有していたものと考えられる。

参考・引用文献

福島県教育委員会　1993『本飯豊遺跡（第１次）』東北横断自動車道遺跡発掘調査報告24　福島県文化財報告書第295
柳沼賢治　2012『古墳出現期の交流と地域間関係』福島考古54　福島県考古学会

写　真　図　版

1　調査区全域（東から）

2　基本層位

a　北側基本層位①（南から）　b　北側基本層位②（南から）
c　北側基本層位③（南から）　d　北側基本層位③（南から）

3　１号土坑

a　完掘全景（北西から）
b　検出状況（南から）
c　断面Ａ－Ａ′（南東から）
d　断面Ｂ－Ｂ′（南西から）
e　焼土塊検出状況（南西から）

4　１号溝跡

a　完掘全景（南西から）
b　北側完掘状況（南から）
c　南側完掘状況（北から）
d　断面Ａ－Ａ′（南から）
e　南側堆積状況（南から）

5　２号溝跡完掘全景（南西から）

6　１号流路跡完掘全景（南西から）

7　1号流路跡出土遺物

12－1
12－2
12－3
12－4
12－5
12－6
12－7
12－8
12－9
12－10
12－11
12－12
12－13

12－14
12－15
12－16
12－17
12－18

8　遺構外出土遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	けんどうよしまだたきねせんかんれんいせきはっくつちょうさほうこく１
書 名	県道吉間田滝根線関連遺跡発掘調査報告１
副 書 名	八反田遺跡
シ リ ー ズ 名	福島県文化財調査報告書
シリーズ番号	第537集
編 著 者 名	佐々木慎一
編 集 機 関	公益財団法人福島県文化振興財団遺跡調査部調査課 〒960-8115　福島県福島市山下町1-25　TEL024-534-2733
発 行 機 関	福島県教育委員会 〒960-8688　福島県福島市杉妻町2-16　TEL024-521-1111
発 行 年 月 日	2019年11月29日

所収遺跡名	所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		㎡	
八反田遺跡（はったんだいせき）	福島県田村郡小野町大字小野新町字八反田（ふくしまけんたむらぐんおのまちおおあざおのにいまちあざはったんだ）	07522	52200147	37° 17′ 47″	140° 37′ 15″	20180718 ～ 20181012	1,700㎡	ふくしま復興再生道路の県道整備事業に伴う記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
八反田遺跡	散布地	縄文時代後期・晩期 弥生時代中期・後期 古墳時代前期	土坑　１基 溝跡　２条 自然流路　１条	縄文土器 弥生土器 土師器 陶器	古墳時代前期では地元の土器の他に、北陸系の土器が出土した。

要 約	右支夏井川の東側丘陵裾部の谷底平野に立地する遺跡であり、弥生時代中期と古墳時代前期を中心とした遺跡である。

＊経緯度数値は世界測地系（測地成果2011）による。

福島県文化財調査報告書第537集

県道吉間田滝根線関連遺跡発掘調査報告１

八反田（はったんだ）遺跡

令和元年11月29日発行

編　集　公益財団法人福島県文化振興財団　遺跡調査部
発　行　福島県教育委員会　（〒960－8688）福島市杉妻町２－16
公益財団法人福島県文化振興財団　（〒960－8116）福島市春日町５－54
福島県土木部　（〒970－8670）福島市杉妻町２－16
印　刷　八幡印刷株式会社